

荒木先生との思い出

——デリダから芥川へ——

小谷内 郁宏（静岡産業大学教授）

これは自慢していいことなのか、どうなのかわからないが、私は筑波大学一期生である。1974年4月に第1学群人文学類に入学した。今では多くの校舎が建ち並ぶ、日本でも有数の巨大なキャンパスとなったが、当時はまだ校舎も体芸棟しかなく、施設はないない尽しの有様で、正直、入学生たちは内心がっかりだったのである。

そんな中で、どういうわけか私は文学を志した。今思えば幸せな日々であった。国文学には小西甚一先生、平岡敏夫先生、英米文学には高村勝治先生、赤祖父哲二先生、そして仏文学には佐藤弓葛先生、島利雄先生といった諸先生方の薫陶を授かることができたのである。

荒木先生が筑波大学に赴任されてきたのは、私が文芸・言語研究科一般文学専攻に入学する前年度であったように記憶している。当時の先生は、まさに新進気鋭の英文学者といった風情であった。先生と私は、年の差8歳なので、先生はまだ30歳をちょっと出たばかりであったはずである。後に先生と世間話しをする機会があり、先生の父上と同じく大学教授であり、実家が東京で、私の実家ともかなり近くであることがわかったりして、以後は親しく接していただいた。

当時そして近年に至るまでの先生の学問的印象と言えば、一貫して尖っていたという感がある。先生は、昔から文芸の新思潮が好きで、「理論」志向であった。故に、先生と私の共通の話題はフーコーであったり、バルトであったり、デリダであったりした記憶がある。私の方は多分に知ったかぶりの見栄だったのではあるが。

先日、先生から「芥川龍之介と腸詰め」というご著書をいただいた。先生の最近の研究対象は芥川龍之介や国木田独歩といった日本近代文学であるらしい。読了後、私は得も言われぬ心地よさである感慨を覚えた。先生は、これまで蓄積されてきた文芸理論を自家薬籠中の物として、「腸詰め」という符号を鍵に、見事に芥川の『鼻』という作品を丹念に読み解き、新解釈を打ち出し、さらに明治・大正期の日本の世相をも浮かび上がらせていたのである。新しい視座を持った芥川作品研究であることは間違いないだろう。

私には、ここに至って先生は円熟の境地に達せられたのかなと思われる今日この頃である。